

環境をテーマにしたワークショップによる教材研究

-ときわミュージアム・植物現代アート展 (Plan-tRee-Location) から-

中野 良寿

A Study on Learning Materials for the Workshop about Global Environment
-From the exhibition of botanic contemporary art (Plan-tRee-Location)
in Tokiwa Museum Ube Yamaguchi-

NAKANO Yoshihisa
(Received August 6, 2009)

キーワード：美術、環境教育、教材

はじめに

2009年2月、山口県宇部市・ときわ公園内の「ときわミュージアム」において、植物現代アート展 (Plan-tRee-Location)¹⁾ が行われた。この展覧会は環境をテーマにした美術作品展示およびワークショップで構成されており、ときわミュージアムの植物をモチーフしている。また、温暖化などの環境の問題について、アートの視点から考え、展示したものである。本稿ではこの展覧会とワークショップの実践から環境をテーマにした美術の教材研究の可能性を述べる。

1. ときわミュージアムについて

1-1 地域性

ときわ公園は山口県宇部市にあり周囲12キロの人工湖(常盤湖)を中心にして、市民の集う市のシンボリックな憩いの公園になっている。宇部市は瀬戸内海の周防灘に面し、石炭産業の興隆とともに発展した市である。同市は宇部興産の発祥地であり、同社は現在もこの地に本社機能をもち、セメントなどの生産をおこなっている。人口は約18万人で市の中心地に近いところときわ公園を擁する。また、ときわ公園は1932年の渡辺祐策氏の私有地の寄贈により誕生し、その後、何度かの開発の後、現在のような形態となっている。²⁾

1-2 ときわミュージアムの成立

ときわ公園は公園の中心近くの常盤湖と市道に挟まれた空間を使い「宇部市野外彫刻美術館」として多くの野外彫刻を展示してきた。2007年ときわ公園内にある、サボテンセ

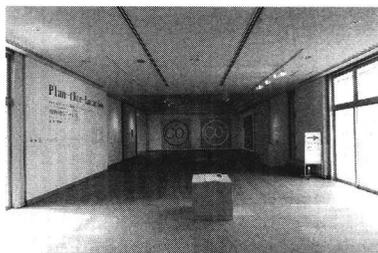
ンターから発展した「熱帯植物館」と「宇部市野外彫刻美術館」が統合され、「緑と花と彫刻の博物館」と位置づけられた。ときわミュージアムの名称はこの「緑と花と彫刻の博物館」の愛称である。現在では愛称の方をよく耳にするが、正式名での呼び方が少し固い印象であることから、ときわミュージアムの方が市民には浸透している。

2. (Plan-tRee-Location) 展覧会について

2-1 展覧会の主旨

本展覧会は2009年2月11日から3月9日まで、ときわミュージアム内の企画展示室と熱帯植物館で美術家・中野良寿による個展として行われた。主催は宇部市・ときわミュージアム、後援が山口大学だった。企画当初から「植物と現代美術」という内容を満たす展覧会という意図があったことから展覧会のテーマに「環境」を据えた。

植物現代アート展 (Plan-tRee-Location) のチラシでは地球温暖化、世界同時不況、同時多発テロ、新型ウィルスのパンデミックのことなど、地球規模で生じる出来事が触れられている。また、バック・スター・フラーによる「グローバリゼーション」と地域社会との関係を重視する姿勢についても取り上げた。表現方法は平面、写真、立体物を様々な形で空間に配置したインスタレーションの手法をとった。また、「グローバリゼーション」を考える依り代として文字通りグローブ（地球を表す球体）を、ビニールを素材にしたバルーンで表現することも試みた。展覧会の副題である (Plan-tRee-Location) は英単語を合成して記述したもので、Plan、tree、Location や Plant、Relocation などの複数の意味が受け取れる。



展示会場風景（ときわミュージアム第1企画展示室）

2-2 CO2 (Global Obsession)

この作品はCO₂の元素記号をデザインしたものをマグネットにしたものである。このマグネットは2008年7月に山口市の中心地商店街にある「レンタルボックス街知箱(まっちばこ)」において行われた韓国人美術家、ウォン・ハ氏の山口市の商店街をテーマにしたワークショップ³⁾に参加した際に考案したものである。

このマグネットは自動車の後部に装着して使用するようにつくられており、実際に装着した車に乗っている運転手にはCO₂の記号は見えない。しかし後方に連なる自動車の運転手には、はっきりとCO₂の記号が確認でき、自動車が排出する二酸化炭素の増加による温暖化の影響を認識する注意喚起になることを意図している。このマグネットは美術作品であるとともに、実用的な掲示物、エコ・グッズとしてレンタルボックス街知箱で販売し、以後継続的に商品化されることになった。

2-3 CO2 (Global Obsession)

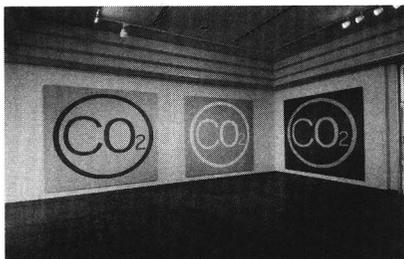
CO2 の元素記号をデザインしたマグネットを自家用車にとりつけた状態を撮影した写真作品。素材は印刷紙にデジタルプリント、ガラスのついた白いフレーム、サイズは 30cm×42cm。この写真はマグネットの使い方を示すとともに、自動車はエンジンをかけると二酸化炭素を排出していることを示している。近年ではハイブリッドカーや電気自動車など自動車を製造する各社が環境対応車の開発・生産に躍起になっているが、このように CO2 のマークを大きく明示したデザインの車はほとんど見かけない。その理由として CO2 の記号が、現代人にとって「排除すべき悪」というイメージとして定着しているからであると推測する。



写真作品：CO2 (Global Obsession)

2-4 CO2 (Global Obsession) “Kamenozoki” #1～#3

三枚のパネルで構成された CO2 Painting “Kamenozoki” は CO2 の記号をそのモチーフとして全面に使用している。色彩は日本の独自色のひとつである“瓶覗き”の色から選んだ。ただし、“瓶覗き”の色は、はっきりとした色の標準がある訳ではないため瓶覗きのイメージから想像される色を混色してパネルに塗布した。“瓶覗き”の色の語源については主に二つの説がある。一つは藍染めを行う際、瓶の中から繊維を引き上げ最初に色具合をみるときの薄い藍色のこと。もう一つは、やはり染色につかう藍瓶のなかを覗いたときに反射して見える空の薄い青色のことである。どちらの説も考えられるがこの展覧会においては後者の藍瓶を覗いたときに見える薄い空色の方を選択した。人が瓶を覗く行為に惹かれること、空から瓶の中までの大気の様子が映り込んだ色であることがこの展覧会の主旨と符号すると考えたからである。サイズは 2350mm×2350mm×40mm である。素材は木材、綿布、アクリル絵の具、外壁用ペンキ等が使われている。記号のデザインはマグネットに使用したデザインと基本的に同じだが 2メートル 30センチほどの直径をもつ CO2 の記号は日常目にする記号としてではなく、よりシンボリックなイメージを与える。美術的な手法としてはポップアートにおける「オブジェ化」の手法に近い。



平面作品：CO2 (Global Obsession) “Kamenozoki” #1～#3

2-5 “Kamenozoki”

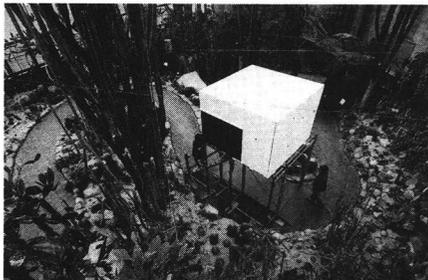
三つのCO2 ペインティングで囲まれた空間の中央に置かれた作品。素材は宇部市では比較的手にはいりやすい硫酸瓶と水、CO2 マグネット。実際に瓶覗きの行為を体験できる装置としての作品。しかし瓶を覗くと見えるのは空ではなくCO2のマークを覗くことになる。



展示作品：“Kamenozoki”

2-6 Observation Tower “Kamenozoki”

このオブザベーション・タワー（観察塔）形式の作品は、ときわミュージアムのサボテン室のほぼ中央に位置しており、小道の路上をまたぐようにして設置された。鑑賞者は階段を登って暗室に入り、設置されたいくつかの小穴からそっと外を覗く仕掛けになっている。いかにして外界をみるのか、どうやって植物をトリミングするのか、視ること／視られること、様々な見方を楽しんで、新たな視点を発見することを鑑賞者に促している。



サボテン室展示作品：Observation Tower “Kamenozoki”



内部風景

2-7 Globe (model)

熱帯植物園の中に設置されたバルーンは、グローブ（地球を表す球体）を表現している。地球温暖化の原因のひとつにCO2増加による温室効果があげられるが、実際の温室の中にさらに小さなグローブを設置することにより、私達の住む地球について想いを馳せ、改めて地球環境について考えるきっかけを提供したい。この作品は会期中におこなわれたワークショップのなかで参加者が制作した作品が付け加えられた。



熱帯植物園での作品展示風景：Globe (model)

3. ワークショップ (Plan-tRee-Location) について

3-1 三部構成のワークショップ

2009年2月14日(13:30~16:00)に展覧会とあわせて環境およびグローブ（地球の形）をテーマに、（1）過去の現代美術の作家・作品紹介（2）グローブの形を水彩紙の上に描くこと（3）グローブ型のバルーンを作ることの三部構成のワークショップを行った。参加者は児童とその保護者、約20名で、山口大学の大学生他4名がボランティア・スタッフとして加わった。かつて深刻な環境問題を克服した宇部市で、アートの視点により環境を再考察することを改めて考え、感じてもらうということを軸にして行った。同時開催の地球温暖化の原因の一つにもなっている二酸化炭素をモチーフにした展示作品や、温室の植物をモチーフにした作品など、それぞれが環境について様々な視点で制作している作品も具体例としてあげた。

3-1-1 過去の環境をテーマにした現代美術作品の紹介

現代美術の作品には地球環境をテーマにした作品が多数ある。現代の環境を作品に取り入れる美術家にとって、工業化による70年代の環境汚染の問題など看過できない問題を作品のテーマにすることも多かった。そのような美術家とその作品例をあげる。

・ ヨーゼフ・ボイス (1921-1986)

フルクサスに関わり、様々なパフォーマンス、ドローイング、脂肪、熱、蜜蝋、フェルト、玄武岩などを使ったインスタレーション作品で知られ、社会彫刻の概念を提唱。ドイツにおける「緑の党」に関わるなど、美術家としてはもちろん、アクティビストの側面でも有名である。多数の作品の中でもドクメンタ7(1982年)で発表した「7000本

の檜の木」プロジェクトは自然保護運動と芸術との境界にあたる作品である。これは檜の木を植樹するプロジェクトで、街の中に植えられた 7000 本の檜の木はドイツのカッセル市で大きく育っている。

・ ロバート スミッソン (1938-1973)

アメリカ人でランドアートの潮流に関わった重要な美術家。美術作品と環境の関わりについて深く言及し、場所（サイト）と非場所（ノンサイト）の概念を明確にした。⁴⁾ 代表作はアメリカのユタ州のグレートソルト湖に造った「スパイラル・ジェティー」である。これは湖の中に土砂や岩石で造った螺旋状の突起で、非常にスケールが大きく湖の水面が上昇すると作品も水没する。彼は土木工事の方法でこの螺旋状の突起を造ったが、若くして飛行機事故で死亡した。制作過程を記録した映像についても再評価がなされている。

・ リチャード ロング (1945-)

イギリスにおけるランドアートの美術家として名高い。自然環境の中を歩行し、その足跡や積み上げた石などを記録して作品とする。アメリカのランドアートの作品が見方によっては大規模な環境破壊にも見えるのに対し、イギリスのランドアートはリチャード ロングに代表されるように自然への干渉を最小限に抑えようとする傾向がある。

・ トニークラッグ (1949-)

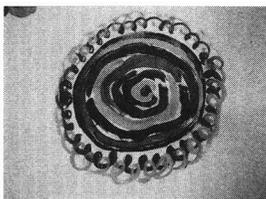
イギリスのニュー・ブリティッシュ・スカルプチャーの代表的な彫刻家。1970 年代に浜辺で採取できるプラスチックのゴミを壁や床に一定の基準で並べた作品を制作。ランドアートなどから影響をうけつつ、自然素材だけではない廃材利用による作品を制作・発表した。

・ デビッド・ナッシュ (1945-)

イギリスの彫刻家、倒木を使い、彫刻を制作するなど、自然と深く関わりながら制作を進めるスタイルを持つ。作品の形態は人、自然、彫刻との関係を暗示する抽象的な作品が多い。植林したトネリコの木をドーム型にした「トネリコ・ドーム」は自然との共同作業が作品となっている。

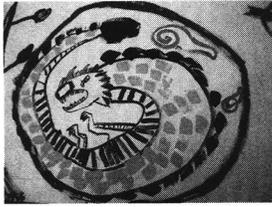
3-1-2 グローブの形を水彩紙に描くワークショップ

次にグローブ型のバルーンを作る前に 10 メートルのワトソン紙（水彩紙）を二巻使ってグローブの形を自由に紙の上に表現してもらった。参加者は普段、水彩紙を使い慣れていない人が多いためか、大きな新しい紙に自由に描くことをためらう人が多かったが、一旦筆で描くことに慣れると、非常に勢いのある線を使い、カラフルで個性的なグローブの絵を描いた。中には抽象的で決まりきったグローブの形に収まらない自由な表現も見られた。



作例 1

花とグローブを結びつけて描く例は多かった。この絵では具象的な花ではなく幾何学的な形をとどめようとしている。

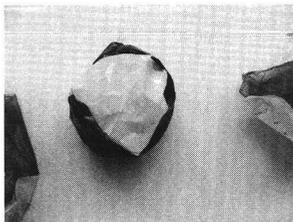
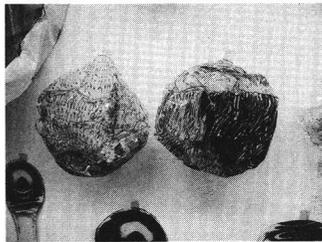
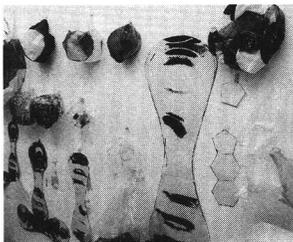


作例 2

これは男子児童の描いたグローブの例であるが、中央に丸くなったドラゴンが描かれている。ドラゴンは彼の絵の最近の主要なテーマで、彼のつくるものの中には頻繁にドラゴンが登場する。

3-1-3 グローブ型のバルーンをビニールシートで作るワークショップ

グローブを水彩紙に自由なイメージで描いたあとに、そのイメージを生かしつつビニールシートでバルーンを制作した。この段階では用意したグローブの形が作れる展開図の雛形を参加者に配り、配布した赤、白、透明、緑のビニールシートを展開図にあわせて裁断した。色は単色あるいは二色、透明のビニールシートにはマジックやマーカーで色を付けた。最初の案としてビニール同士を針と糸で縫い合わせる方法も試みたが、非常に時間がかかる事と、幼児や児童にとってこの方法はかなり困難であると判断し、ホッチキスを使ってビニールシートを接合することにした。接合にあたっては親子の参加者が多いことが幸いして、親がビニールシートを持って、子どもがホッチキスでシートを留めるという共同作業が行われ、上手に接合することができた。平面状の作業はここまでで、袋状になったビニールシートを裏返し、隙間に息を吹き込み立体にした。参加者の反応は概ね好評で平面のビニールシートが立体的なグローブを表すバルーンになることに親子ともども大変興味をもっているように見られた。後日、出来上がった作品は熱帯植物園の樹木の間設置された。

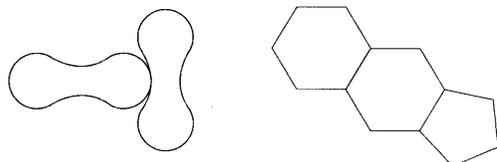


バルーンのバリエーション、熱帯植物園に設置後のバルーン

4. 美術・環境教育のための教材として

ワークショップ (Plan-tRee-Location) では三部構成の内容を二時間半の中に盛り込んで行った。対象者は親子の参加が予想されたので、児童から大人にも対応できる内容を念頭に計画した。初等・中等教育における教材化のためにはこの三部構成の一部を一校時の

授業時間に対応させることが考えられる。造形あそびとして造形的な興味だけで行う美術の授業ではなく、地球環境やリサイクル、現代美術の作例などをふまえて、環境と造形美術の関係を考察できることが望ましい。また、グローブ型のバルーン制作のための型紙(展開図1)のバリエーションが多ければそれだけ多様な形のバルーンが制作できる。球形に近い立体を作るための展開図は様々な手法があるが、複雑すぎる作業が求められるものは却って制作意欲を削ぐ恐れもあるので、最もシンプルな展開図から複雑なものまで、選択できることが望ましい。



展開図 1

展開図 2

グローブ型のバルーン制作のための型紙

おわりに

環境教育に関する領域と美術教育に関する領域は重複している部分があるにも関わらず、実際の教材を組み立てる段階において、それぞれ別の学習領域として認識されやすい。地球環境問題と人間についての考察は両者必要な事柄である。グローブ型のバルーンを制作することは、都市空間における環境知覚の発達⁵⁾と関連して考えると理解しやすい。また、環境と美術の関係については現代美術の美術家たちが長年取り組んできた事例がありワークショップや初等・中等の授業として教材化するための多数の作例や可能性を指し示してくれている。このことから教材化にあたり様々な可能性を汲み上げた横断的な授業のための、研究・実践を進めることが必要と考えられる。

謝辞

本稿の作成にあたり宇部市ときわミュージアムおよびワークショップ参加者の御協力をいただきました。感謝の意を表します。

注

- 1)ときわミュージアム植物現代アート展 (Plan-tRee-Location) 案内チラシより, 2009.
- 2)上田芳江編:ふるさとの思い出写真集宇部, 1979.
- 3)山口現代芸術研究所主催、アートイン木町「つなぐ」'08 日韓文化交流基金 NEWS, 47号, 7p, 2008.
- 4)トニー・ゴドフリー:コンセプチュアルアート, 岩波書店, 2001.
- 5)松岡憲知他:地球環境学- 地球環境を調査・分析・診断するための30章-, 2007.